

〔第五回日本文化学研究会発表要旨〕

「すき」概念の展開

李 貞 熹

(1992.12.5発表)

はじめに

「すき」という言葉は動詞「すく」の名詞形で、辞書類で得られる知識としては、①なみなみでない物好み、普通程度では満足できない深い愛着、執心の意味があり、②恋愛の情趣を一途に好むこと、つまり、好色の意味としても使われ、③芸道に深く愛着を持つこと、またそのひと、風流、風雅に没入すること、という意味などがある。特に中世においては文芸、芸能を学ぶ者のもっとも基本的な心構えとして重視されて、文学理念として形象化されていく。さらに「すき」は中世末期になると茶の湯をたしなむこと、というふうに関念の展開をみせている。

小論では、このような「すき」概念の展開の中で、中古から中世初頭にかけて「数奇」という漢字が当てられたことに焦点をあわせていろいろな推測を試み、漢字「数奇」の原義「不運、不幸」とのかかわりについて述べてみたいと思う。

I

まず、文献的に「すき」という言葉は奈良時代にはみられず、現存文献にみえるのは平安時代の『伊勢物語』あたりからである。『伊勢物語』には「すき」の用例が4例あるが、4例とも恋愛の情趣を一途に好むこと、つまり、好色の意味で使われている。しかし、『大和物語』では「すき」の用例2例の中で、103段では好色の意味で使われ、128段では歌をよむ風流人の意味で使われている。『大和物語』あたりから好色、風流、といった二通りの意味がともに使われるようになり、以後『うつほ物語』『源氏物語』も同じ傾向を見せている。

このように平安時代の物語は「すき」といった場合、好色、風流の二通りの

意味合いが混在して使われていたが、平安末期から鎌倉初期にかけて「数奇」という漢字が当てられ、その意味内容に変化が起こり、いささかその趣を変える。つまり、好色の意味合いが後退するようになるのである。中世初頭にはこのような好色の意味合いが後退した「すき」の実践者たる「すきもの」たちが歌論書、説話集に散見するようになる。歌論書、説話集の中から歌の道に執念を見せているすきものの話をみてみたい。

普通文学史の中で「すき」が自覚的に受けとめられるようになるのは能因頃からだといわれる。初期のすきものの典型的な存在が能因といえよう。能因をはじめとするこの時期のすきものたちは主に和歌の道に執念をみせた歌人たちである。能因の逸話は藤原清輔撰の『袋草紙』に紹介されている。

「加久夜長刀節信ハ数奇者也」と「すき」に漢字が当てられている。これが「数奇」という漢字が当てられたもっとも早い例ではないかと思われる。この逸話のだいたいの意味内容は数奇者節信が能因とはじめて会った時、能因は歌枕で名高い長柄橋造営の時の鮑屑を出し、節信は同じく歌枕で名高い井提の枯れた蛙を出してお互いに称賛して別れたという話であるが、作者清輔はこの逸話を記した後「今の世の人嗚呼と称すべきか」と評している。歌枕で名高いところの鮑屑と蛙だということを知らない当代の人々の目には節信、能因らのこのような奇行がばかげた行動に映ったのであろう。しかし、それらのものが歌枕の地でとれた貴重なものだとしてこの逸話を記した清輔は「嗚呼」と称する人の中に自分自身は入らないという書きぶりである。数奇の道に徹した能因らの行動は清輔に憧れの念をさえ抱かせたのかもしれない。おわりの部分に「古ノ歌仙は皆スケルナリ。然者能因ハ、人ニ、スキタマヘ。スキヌレバ秀歌ハヨムトゾ申シケル。」と記されているが、能因は「すき」を秀歌を詠む基本理念として扱い、能因のこの言葉は後の歌人たちに影響力を及ぼすようになるのである。橘成季編纂の『古今著聞集』でも「能因はいたれるすきものにてありければ」と能因をすきものとみている。『十訓抄』にも数奇者の逸話がいくつかある。巻一の惟規は臨終に際して僧が正念を進めるのも聞き入れず、あくまでも和歌に執した人であったし、巻十の河内重如は死ぬ際にも歌を詠んだほど歌の道に執着した人であった。『無名抄』は数奇者といわれた鴨長明が編纂した歌論書であるが、その中の永縁僧正は自分の歌を広めようと思って琵琶法師どもに物などをあたえて「有難き数寄人」と呼ばれた人で、頼実秀歌を詠むために命までささげた人だったのである。

このように歌論書、説話集に紹介された初期の数奇者たちはいずれも歌の道つまり、おのれのすきに執念をみせた人ばかりで、編執的なまでの数奇の精神はこの時期に根をおろしていたといえよう。

II

「すき」に「数奇」という漢字が当てられるようになるが、漢字「数奇」の元の意味は何であるかを調べてみて「すき」と「数奇」の関係を探ってみたい。

大漢和辞典によると、「数奇」はスウキと読み、「ふしあわせ、不運」という意味である。中国の文献では「数奇」がどのように使われたのだろうか。

『史記』李將軍傳には「李廣老數奇」とあって、李廣は老齡で「不運の身である」という意味に解釈できる。また漢詩にもいくつか用例があるが、中国の文献にみえる「数奇」はいずれも不幸、不運の意味で使われていることがわかる。

日本で「すき」という言葉が辞書類にはじめて登場するのは平安末期に編纂された『色葉字類抄』からであろう。『色葉字類抄』前田本に「數奇スキ、マサリガホナシ」と出ている。「マサリガホナシ」とは「人に自慢できるような顔付き、すぐれまさっていると思う様子がない」という意味である。「マサリガホナシ」の用例は『蜻蛉日記』天祿二年四月一日、作者道綱母が長い精進をはじめめる段に出ているが、ここでの「マサリガホナシ」は「人にまさって得意な顔付きでないこと」、つまり、悄然としてみすばらしげなありさまという意味で使われている。漢字原義の不幸、不運の意味が残っているとみていいであろう。数奇が不幸の意味で使われた用例は『本朝文粹』巻六にもみられる。

このように平安時代の数奇は用例が少数ではありながら漢語の原義を保ったまま使われていたことがわかる。ではなぜ、風流の道に身を投じるという「すき」に不幸の意味の「数奇」という漢字が当てられたのであろうか。

「数奇」は「すき」の当て字とされている。明治書院の『国語学研究事典』には「当て字とは形音義を兼ね備えた漢字本来の用法にこだわらずに漢字で表記したもので、意義文字である漢字を用いるのであるから、語源俗解を含む何らかの解釈—意味上の関連が付与されるのが常であり…」と書かれている。当て字とはいえ、字と音との間には結び付く必然性が見出せるというわけである。

11世紀のはじめに書かれた『源氏物語』には「数奇」の漢字はまだ当てら

れていないが、「すき」の実践者であるすきものの用例に注意したい。『源氏物語』にはすきものの用例が16例あるが、主役である光源氏には1例も使われていないということは重要なポイントになると思われる。『源氏物語』ですきものと呼ばれているのは、光源氏のような大貴族からは一段も二段も低い階級の人々である。ここでのすきものは『色葉字類抄』でいう「マサリガホナ」キ人々であり、『伊勢物語』における昔男、つまり、「身をえうなきものに思ひなし」た無用者とも通じるものがあつたのではなかろうか。『源氏物語』の後に成立した『狭衣物語』にも2例の用例がみえる。1例は召使の女童に、もう1例は狭衣の乳母子式部大夫道成に使われている。大夫は身分が五位の人であるから、狭衣の用例からもすきものはどちらかといえば身分の低い人に使われたことが確認できる。この時代の身分というのはとても大事なことで、身分の低い人々がすきものと呼ばれたことは数奇の原義「不運、不幸、不遇」と無関係ではなかったのではなかろうか。

Ⅲ

身分の低い人がすきものと呼ばれた事実は先述した歌論書、説話集に紹介されたすきものたちにもあてはまると思われる。能因をはじめとするこれらのすきものは生存年代が『源氏物語』の成立年代とほど遠くない人々である。そしてこの人々の行動にはもはや好色のイメージはほとんど感じられなくて、歌の道にだけ執念をみせている。『源氏物語』における身分の低い人に使われたすきものの用例がここでも適用される。惟規は『源氏物語』作者紫式部の兄で、身分は五位である。『和歌文学大辞典』には「目立つ才能はなかったらしい」と御堂関白記の引用が記されている。節信は四位河内守になった人で嗚呼と称される奇行を行った人である。重如の身分は六位で、説話集などで「下賤者」「其品いやしきもの」として記憶される存在である。頼実とは和歌六人堂の一人で、従五位下までしか身分があがらず、土佐国に配流されるというつらい経験の持ち主で、永縁は世から離れた遁世者である。このようにすきものと呼ばれた人々は五位、六位の身分の低い人か、あるいは能因、永縁のような世を離れた遁世者であることがわかる。

目崎徳衛氏は『西行の思想史的研究』の中で、数奇の遁世者という氏特有の用語を使って数奇の遁世者の系譜を時代によって三段階に分けている。目崎氏

の分類によると能因は第二段階、摂関時代の数奇の遁世者にはいり、この摂関時代には貴族文化繁栄の中で不遇、沈淪の官途よりも花月の美に陶醉する自由を選ぼうとして遁世する者が排出し、彼らの遁世の理念として数奇が確立したと目崎氏はみている。世に入れられないために世から逃れた身分の低い遁世者は現世的な栄達は断念し、というよりも断念せざるをえなくなってひたすらに数奇の世界にのみ生きようとした存在であった。不遇意識を強く抱いたまま風流の道、つまり数奇の道に身を投じるしか術がなかったのではないかと思われる。数奇の遁世者の典型といわれる能因が官途に見切りをつける根本原因は不遇、沈淪の意識にあり、人々が嗚呼と称するような奇行な行為をしたのも能因の心の中に時勢に対して一種の不満又は劣等感があったと目崎氏は『平安文化史論』の中で述べている。能因にみられるこのような不遇意識は能因にかぎらず、能因と同じ時代にすきの世界に生きぬいたすきものたちの共通した意識であったと私はみたい。

おわりに

これまでみてきたように、『源氏物語』のすきものの用例が身分の低い人に使われたこと、漢字数奇が使われはじめた中世初頭になる書物ですきものと呼ばれた人々は、官位が低く不遇意識をもっていたということを合わせ考えると漢字数奇は単に漢字の音、訓を借りたものでなく、使われ始めた当初は「不遇、不幸、不遇なめぐりあわせ」の漢語の原義となんらかの関わりがあったのではないかと結論づけられる。

すき概念は鴨長明あたりになると、またあらたな展開をみせる。仏道と結び付く概念になるわけである。鴨長明の数奇に関しては今後の課題にしたい。

〈お茶大人間文化研究科（博士課程）2年〉